

第11回日経「星新一賞」 受賞全作品を語る (当事者が)

ショートショートのリジェンド・星新一の名を冠し、

- ・1万文字の理系小説が対象（初代正賞は架空論文が受賞、ノーベル賞受賞者の選考委員が選評を執筆！）
- ・受賞作品全文オンライン公開
- ・AI利用作品を受け付け（入賞例あり）
- ・最終選考委員は毎回変わる各界著名人

という、特色だらけの12年続いている公募SFコンテスト。

第11回の入賞全作品について、一般部門入賞者本人が、感想を語ったり入賞者の活動を紹介したりして、

SF読者の「無料読書ライフ」の一助たらんとする企画。

第11回星新一賞 基本データ

日本経済新聞社が主催する、「理系文学」を対象にした公募SFコンテスト。創設・運営には日本SF作家クラブと電通が深く関わっているとのこと。
第11回公式Webページ <https://hoshiaward.nikkei.co.jp/archive/no11/index.html#overview>

一般部門(制限なし/課題「あなたの理系的発想力を存分に発揮して読む人の心を刺激する物語を書いてください」/10,000文字以内)と、
ジュニア部門(中学生以下/課題「100年後の未来を想像して物語を書いてください」/5,000文字以内)の2部門。
応募期間は 2023年6月25日(日)～2023年10月2日(月) 23:59

受賞作品は、

・[Honto電子書籍](#)で全文を無料公開(登録要、縦書き、選評・作者紹介あり)

および、第11回から

・[日経電子版](#)webサイトでも全文を無料公開(登録不要、横書き、選評・作者紹介なし) (→ワンクリックで機械翻訳できる!)

審査員：岡田晴恵(白鷗大学教授)/高島雄哉(小説家、SF考証)/荒俣宏(作家)/佐竹美保(挿絵画家)/鴻上尚史(作家・演出家)/滝順一(日本経済新聞社 編集 総合解説センター編集委員)

中間審査員：鏡 明(SF作家、評論家)/牧 眞司(SF研究者、文芸評論家)/山岸 真(SF翻訳業)/三村 美衣(書評家)

後援 文部科学省

協賛企業 [株式会社アマダ](#) [旭化成ホームズ株式会社](#) [日本図書普及株式会社](#)(図書カードNEXT)

協力団体 [小松左京ライブラリ](#) [一般社団法人日本SF作家クラブ](#) [エヌ氏の会](#) [きまぐれ人工知能プロジェクト](#) [作家ですのよ](#) [独立行政法人国立科学博物館](#) [一般社団法人情報処理学会](#) [一般社団法人人工知能学会](#) [公益財団法人せたがや文化財団](#) [世田谷文学館](#) [一般社団法人日本ロボット学会](#) [特定非営利活動法人ロボカップ日本委員会](#) [国立大学法人お茶の水女子大学](#) [公立大学法人公立はこだて未来大学](#) [独立行政法人国立高等専門学校機構](#) [国立大学法人東京工業大学](#) [学校法人桑沢学園](#) [東京造形大学](#) [株式会社日経サイエンス](#) [電気通信大学](#) [人工知能先端研究センター](#) [第61回日本SF大会「Sci-con2023」](#) [国立研究開発法人情報通信研究機構\(NICT\)](#) [作家養成スクール心齋橋大学](#)・[東京作家大学](#)

特別協力 国立新美術館

今期受賞作 OverView

今期の受賞作はどんな話？その（１） ジュニア部門まとめ

5作品入賞。

- ・ グランプリ [「ライトコート」](#) 竹腰 奈央 (近未来の切実な青春)
 - ・ 準グランプリ [「おいしい世界の歩き方 東京」](#) 田中 文瑛 (洒脱な架空旅行ガイド)
 - ・ 優秀賞 [「見えない力」](#) 岡田 頼和 (ストーンと落ちる愉快的未来ガジェット)
 - ・ 優秀賞 [「エーアイさんへ」](#) 岩本 名央 (人工知能に託す夢と現実と希望)
 - ・ 優秀賞 [「星になる」](#) 名もなき佐助 (苦難の歴史を乗り越えた人類の揺らぐアイデンティティ)
- これだけ幅を出されると、「傾向と対策」の打ちようもない。「SF」を極力広く捉えよう、という主催者の心意気を感じました！
- 共通しているのは、文章の確かさ。ストーリーにも、若書き的なところ皆無。木下なんかよりも、ずっと「人間がわかっている」と思いました！ 授賞式のコメントも皆さんユーモアを交え明瞭・的確で、これが二十一世紀の中学生の力というものか、と、未来に希望が湧いてきました。ありがとうございました！

今期の受賞作はどんな話？その（2） 一般部門まとめ

4作品入賞。

- **グランプリ** 「冬の果実」 **柚木 理佐** (ミニマルな場面で描く地質スケールの環境危機、そして、それに抗う人々の志)
 - **優秀賞(アマダ賞)** 「彼方には輝く星々」 **木下 充矢** (お隣の恒星系で車輪型生命がトタバタ頑張る変格気象SFまたは「ご隠居さん」大活躍)
 - **優秀賞(旭化成ホームズ賞)** 「ポラリス」 **玖馬 巖** (記憶の外部化を背景に描かれる誠実な職業人SF)
 - **優秀賞(図書カード賞)** 「星の灯の狭間にて」 **鷹羽 玖洋** (書痴のハートを驚掴みにする遠未来の富豪の稚気と、生きることの意義)
- こちらもまあ傾向がバラバラです。「広義のSF」であれば受賞の可能性あり、という主催者のメッセージと受け取りました！
- 今期は、現実の諸問題をそれぞれ反映しつつも、はっきりとダーク、またはペシミスティックな作品は見当たりませんでした。これは「時代の気分」なのかも知れません。

作品介绍 ＜ジュニア部門＞

・ジュニア部門グランプリ 「ライトコート」竹腰 奈央

生き生きとした等身大の言葉で語られる、生体認証セキュリティの危機管理がもたらした、光学的ジャミング技術「ライトコート」が当たり前になった世界。

自らの姿をさらすことを避け、黒い繭の中に引きこもって生きる主人公・みるキーたちのクラスにやって来た転校生・翼は、信念をもって素顔をさらす「ノーウェア派」だった。

異分子として陰湿な排斥に逢う翼を、みるキーはなぜか他人事として見過ごすことができない。距離の近づいた二人が到達した意外な真実、そしてみるキーの決断。

瑞々しい。しかし決して繊細ではない。傷を恐れぬ心の強さ。サイバーセキュリティ技術の極相をキャンバスに描かれる、今を生きる若者と、かつて若者であったすべての人の心に刺さるであろう作品。

・ジュニア部門準グランプリ 「おいしい世界の歩き方 東京」 田中 文瑛

愉快的な企みに満ち満ちた作品。食による「問題解決」と、なかなかにつボを突いた東京名所案内の融合。

食べものが美味しそうな小説にハズレなし、と言いますが、ここでも、出てくるアイテムがみな美味しそうなのですよね。「目次」も楽しい。

何だか深い話を読んだ、的な、いやしかしそれはないだろ、的な感覚が横隔膜を刺激する。それらをすっぽりくるむ、クールな洒脱さ。「東京SFアンソロジー」が編まれる時には、ぜひ収録をお願いしたい！

・ジュニア部門優秀賞 「見えない力」 岡田 頼和

とある病院の忘年会をリアリティたっぷりに描き（どうしてオトナ界にこんなに詳しいの？）、うんうん職場の忘年会ってこんなふうだよなあ、と読み進むうちに、巧みに挿入される伏線。

ぱちん、と決まるラストが心地よい。ナッジ理論の応用で実現したとおぼしき、優しい世界を満喫されたい。

木下は重度の方向音痴なので、このアイテム、ぜひ欲しいです！

・ジュニア部門優秀賞 「エーアイさんへ」 岩本 名央

人工智能に人々が抱く夢と、そして、それには遥かに遠い現実。小学校三年生が、大好きなおばあちゃんの認知症を治してほしい、と「エーアイさん」に書いた手紙、それを託されて誠実に悩む教師。

最後に少し成長した少女と、ほの見える希望。場面によつて的確に書き分けられた文体が、このお話の肝だと思います。愛らしい、しかし、それだけでは終わらない話。

木下はChatGPT3.5に、「あなたは自らを非人類知性だと考えるか」と質問して見たことがあります。答えは、

「私は自己意識や自己決定能力を持っていないので自分を『非人類知性』とは考えていない。しかし、人工知能技術によって作成された知性体ではある」。

OpenAI社の慎重な配慮がうかがえる、優等生的回答。しかしその背後に、なんだかこう、AI技術に託した人々の夢が映り込んでいるような気がしたのですね。そんなことを思い出しました。

・ジュニア部門優秀賞 「星になる」 名もなき佐助

短い紙数に詰め込まれた、「第四次世界大戦」を経た人類の苦難の歴史。死を克服したテクノロジーと、それでも残るなにものか。

それらをバックに描かれる、恋人たちの瑞々しく切ない思いと、急転直下の結末。冒頭でサラッと登場する「ドローンドライヤー」（我が家にもぜひ欲しい！）や、『地球使い捨て計画』という用語センスがすばらしい。

しかし、これはハッピーエンドなのか。それとも……。ラストの衝撃力は今期随一だと思いました！

作品介绍 〈一般部門〉

・グランプリ 「冬の果実」 柚木 理佐

体温調節に異常をきたす疾患が蔓延する近未来、低体温症でやがて死に至る運命の語り手と、彼を救おうと手を尽くし、しかし力及ばなかった博士の静かな語り。

赤いリンゴと、やがて全球凍結を迎えるであろう将来の白い地球の鮮烈なコントラスト。博士心尽くしのリンゴの甘煮をはさんでの二人の会話からほの見える、絶望的な全地球的気象変動と、それに抗って「リンゴの木を植え続ける」人々の志。そして、鮮烈で力強い幕切れ。

胸の底が、じわりと暖まる。SFでなくては書かれ得なかった、王道真正面の作品だと思いました。

唐突に響くと思いますが、私の中で本作が占める位置は、スタージョンの「孤独の円盤」や、ティプトリーの「ビームしておくれ、ふるさとへ」に近いものです。SFというジャンルが本質的に持つ、ある種の癒やしの力。

リンゴの甘煮が、実に美味しそうなのですよね。個人的に、「食べ物の美味しそうな小説にハズレなし」と思うのですが、このお話も、その好例だと思っています。

<作者コメント>

疲れた人はちょっと休んで、スプーン一杯分だけ気持ちが軽くなってくれたら嬉しいです。りんごの甘煮を食べたくなったら大成功。

・優秀賞（アマダ賞） 「彼方には輝く星々」木下 充矢

軌道が母星（太陽よりだいぶ暗い）に近いため、地球に対する月のように、潮汐力が強すぎて自転をしない惑星があった。永遠に太陽に向かい合う灼熱の「熱界」と、極寒の「氷界」の狭間に暮らす、車輪状の体を持つ知性体は、巨大な鏡で氷界の氷を溶かし、生存圏を切り開く。水力発電の無尽蔵のエネルギーを元手に、爆発的技術革新が始まる。しかしそれは、新たな危機の始まりでもあった。

<作者コメント>

ネタ元は、科学ニュースWebサイト [ナゾロジーの記事](#) からたぐった、太陽系のお隣さんであるプロクシマ・ケンタウリに潮汐ロックされたb惑星（実在する！）で液体の水が存在しうるか、についての [Ana Loboの研究](#) と、ご本人のツイート。（[その1](#)、[その2](#)）

ほぼほぼ「そのまんま」です。素材の味を大切に。朝に新知見に発奮すれば、夕に足元をひっくり返されようとも辞さず [※]。まあ、車輪型生命は法螺ですが。車輪型生命SFの名作「ハイウェイ惑星」石原藤夫（[早川版](#)、[徳間版](#)）を念頭に、車輪型生命の「別解」をひねり出すにあたっては、はやぶさ初号機では苦杯を舐めたが2号機で見事に雪辱を果たした [ミネルバ・ローバー](#) の力を借りました。ありがとうミネルバ！

あらためて、落語フォーマットの「わからせ力」の凄さを痛感しています。ハードSFと落語の相性はかなり良いと思うので、もっと落語っぽいハードSFやハードSFっぽい落語が増えるといいな。北野勇作先生の「天動説」を読む機会に先日恵まれたのですが、すごく良かったです！

[※] web SF雑誌 Clarkesworld [投稿ガイドライン](#) の「こういうのは採用しづらいかも」リストに、

” stories about the stuff we all read in Scientific American three months ago” と書かれていました。お、おう……。

・優秀賞（旭化成ホームズ賞） 「ポラリス」 玖馬 巖

人間性の本質である「記憶」を、高い職業倫理と繊細な審美眼でハンドリングする未来の職業、「医療理髪師」。

外部記憶装置「エクステ」を物理的および情動的に再編し、アイデンティティと限りある「エクステ」のキャパシティを両立させる高いスキルを持った医療理髪店主・ポーラの元に、三年前に謎の失踪を遂げた、彼女の師であるスピカの消息がもたらされる。

しかし、ポーラが再会したかつての師匠に、ポーラとの記憶は残っていなかった。大切な記憶を切り捨てられたことに深く落胆し、職業的モチベーションを失ないかけていたポーラの元を、スピカその人が訪れる。意外な真実を携えて。

美容師にして医療者。外科医と理髪師が「兼務」だった歴史的いきさつに思いをはせると、より味わいが深い。いかにもな美容院トークの中に、さらりと特異な世界設定を溶かし込む手際が見事。心に迫る未来お仕事SF。謎解きの趣向も心憎い。

<作者コメント>

基本的に自身は現実の先端技術と何らかのモチーフを掛け合わせて、少し先のありえそうな未来を想像して物語を書くのですが、受賞作品（ポラリス）はそれがバランスよくかけた作品の一つだと思います。表彰式で審査員の高島先生から、「ありそうでない近未来の技術の話」と言われたのが非常に嬉しかったです。

・優秀賞（図書カード賞） 「星の灯の狭間にて」 鷹羽 玖洋

人類文明が銀河系に広くその生存域を広げた、はるかなる未来。人類文明有数の資産家・実力者である老女が豪華な軌道上ハビタットに収集していたのは、その重厚な調度にはおよそ不似合いな、希少性のほぼない大量流通した紙の本、それも、手書きの落書きが入ったものばかりだった。そこに彼女が見出した価値とは。

すごく賢いAI従僕と、もっと賢い彼女の、ウィットの効いた会話が楽しい。人類がマインドアップロードを視野に収めた時代に、あえて儂いものに価値を見出すヒロインの稚気は、人間性の本質への思索を誘うとともに、すべての「本読み」の心を驚掴みにすること請け合い。描写の端々が心地よいのです。特に、「手書きの地図の落書き」！

Honto電子書籍版に付く紹介文には「永遠と有限。人と機械。生命と心と美について。」とありますが、本当にその通りの話なのです。うまいなあ！

<作者コメント>

実体験からの話。購入した古本に挟まっていた、丁寧な手書き地図を発見したときの感動を掌編にしました。

文字数がちょうどだったので応募したのですが、最終選考にも残らないだろうと思っていました。アンドロイドと人間の話は定番中の定番だし、9割方会話劇なので。中心の本の書き込みというネタも文系寄りで、本当によく選んで頂けたなと思います。恐縮です。

自分としては、中古の書き込み本って値段下げられちゃうけど味があるよね、という思いを形にできた上、そうした経験がある活字好きの方々にも喜んで頂けたようなので、満足です。

一般部門受賞者に聞いてみた 〈個別質問：柚木理佐さん〉

(Q1) 「覚悟」について

木下) 受賞作の、あえて救いを用意せず、でも絶望はしない、という、潔さ、覚悟、みたいなものに心を揺さぶられました。どうすれば、このように「肝を据える」ことができる／できた、のでしょうか？

柚木) 肝は据わっておらず、日々うろたえています。この作品を書いたのは大病をした時だったので、「まあ、なるようにしかならない」という気持ちと、「綺麗ごとでも理想を書いておこう」という気持ちがありました。「絶望はしない」というのは書く上のテーマです。

木下) とても腑に落ちる感覚があります。私は割と都合の良い話を書きがちなので、そこを踏み止まる作品を読むと、いつも凄くと思うのです。

何もかもをテクニカルに、「斜め上」に解決できる訳ではない。むしろ世の中、解決できない問題の方がずっと多い。「それでもなお」なのか、「ならばできることは」なのか。万能の正解はないけれど、絶望しない方が、きっと後悔は少ない。そんなことを思いました。

(Q2) りんごの甘煮

木下) 受賞作では、りんごの甘煮が重要なアイテムとして高い解像度で描かれています。語り手の父親と博士が作ったそれぞれのりんごの甘煮の、同じところと違うところ。

ここに何か意味が埋め込まれている気がしてなりません。「五感を刺激せよ」とは創作技法としてよく語られるところですが、物を食べるシーンを意識して組み込まれていますか？ それとも、自然に出てくる感じでしょうか。

柚木) ゆきのまち幻想文学賞とご縁があり、東京育ちの私にとって青森は故郷のように感じられます。りんごスイーツは幾つか食べましたが、りんごの甘煮が最高です。私はシャキシャキ派です。五感を刺激することは苦手なので、意識して入れるようにしています。

木下) あのリンゴの甘煮には、青森の記憶が溶け込んでいたのですね。より味わいが深く感じられます。料理はてんで不調法なのですが、冬になったら試してみたい。青森にはまだ行ったことがないのですが、一度行ってみたいくなりました！

(Q3) 全球凍結のこと

木下) 現実の気象危機はもっぱら温暖化が語られがちですが、あえて寒冷化、全球凍結危機（こちらも、ありうべきシナリオの一つとして専門家の間で議論されているようです）が選択されている斬新さに感銘を受けました。この設定を選んだ背景には、もちろん長期にわたって別名義で参加されてきた「ゆきのまち幻想文学賞」のご経験があったことと思いますが（先日ご恵贈いただいた同賞受賞作品集を読んだ後で本作を読むと、改めて、一連の作品が描いた軌跡の「着地点」を見届けたような感慨が湧いてきます）、もし、その他にも、この状況を設定した背景、思い、のようなものがありませんでしたら、お聞かせください。

柚木) 全球凍結を選んだのは、暗い宇宙の中に真っ白な地球があったら美しいだろうというイメージです。凍った後、地熱で復活というルートを考えてことと、後は、熱くて滅ぶのは嫌だなあ、と。

木下) 漆黒の虚空にさえざえと白い地球。そこに、やがて雪融けの、春の兆し。季節感を手掛かりに、地質的イベントがぐっと身近に感じられます。そう、やはり小説は、感じさせないといけないのですよね！

(Q4) 読みやすさについて

木下) 別名義作品を読ませていただいた時にも感じたのですが、特異な設定やシビアな状況を、実にスムーズに、流れるように読めてしまう。長編を1日に2冊は読めてしまう、というのは、木下としては驚くべきペースでした。リーダビリティを高めるために、工夫されていることはありますか？（真似てまねられるようなものでもないとは思いますが！）

柚木) 私はしばしば「人物が生きていない」と評されるので、ストーリーの為に都合よく動く人物模型にならないように、キャラクターを知人友人ととらえるように心がけています。リーダビリティがあると言われたのは、初めてです。

木下) 「知人友人」なるほどです！ 奇想天外に手を届かせようとするなら、足もとはしっかり固めないといけない。私も心したいと思います。

(Q5) キャラクターのイメージソース

木下) 「冬の果実」の語り手と博士について、「たとえば誰々のような」といったイメージソースがもしありましたら、お聞かせください。個人的には、博士はやはり、モジャモジャ頭と髭ちょっぴりのあの高名な理論物理学者なのではないか、と思うのですが。

柚木) 特定のイメージソースはなく、他人の為に一生懸命になりすぎて疲弊してしまう人たちの全体的なイメージです。

木下) なるほど。「他人の為に一生懸命になりすぎて疲弊してしまう人たち」は、別名義で書かれた作品でも印象的だったことを思い出します。(利き蜜師シリーズの仙道とか) そのような人たちを支えたい、という普遍的な感覚に、「冬の果実」は強く訴えかけているのではないかと、改めて思いました。

一般部門受賞者に聞いてみた 〈個別質問：玖馬 巖さん〉

(Q1) テクノロジーと情緒のバランスについて

木下) 情報技術の動向への深い専門的知識を背景としつつ、それを決して中心には据えず、医療理髪師という未来の職業人の矜持と師弟の情愛、という普遍的な感情を中心に据えたところに特に惹きつけられました。このバランス感は、意識してそう狙っておられるのでしょうか？ それとも、知らず知らずそうになってしまう、のでしょうか。

玖馬) こちらの科学技術と人間心理に関する描写のバランス感ですが、ご指摘通り意識して狙っているもの（作品作りで一番重要視しているもの）です。これには、共通質問の方でお答えした沖方丁先生の「マルドゥック・スクランブル」が自身の理想とするSFというのが背景にあるのではないかと思います。

とはいえ、結構人間心理描写部分に関しては、わりと見切り発車することも多いので「知らず知らずそうになってしまう」というのも結構近い気がします。

木下) なるほど納得です。まず心、それを支える／変える、テクノロジー。作劇としても、実社会で技術が果たすべき役回りとしても、正しいあり方、と思えます。それを、あるべき均衡点に持っていくためには、何をすればよいのか。考えてみたいと思います。

(Q2) 医療理髪師の発想源について

木下) 「記憶の外部化」と「理髪」の距離感を軽々と埋めてしまうところが、「ポラリス」の魅力の肝なのではないか、と思っています。この設定を作るにあたり、これこれが発想の根にある、といったことはありますか？

玖馬) 実は構想初期は医師が動画編集者みたいに記憶を普通に「カットする」(編集する)という設定で、理髪要素は特にありませんでした。

設定を練っていくうちに「カット」という言葉の響きから髪のカットと絡められたら面白いな(昔は理髪外科医といって、外科医と理髪師は同じ職業だったこともあり)と思い、そこから後付けで人工毛髪への記憶の外部記録という設定が生まれた……という感じです。

木下) 医療と理髪の世界が、このお話の基線をぐっと広げた感がありますね。一方で、情報ストレージを体外装着する上で合理的かつ、社会的にも受け入れられやすい外観でもある。あらためて秀逸な設定だと思いました。

(Q3) ミステリ要素について

木下) 受賞作終盤の、論理がパチンと閉じる謎解き展開を、非常に心地よく読みました。もしかして、ミステリも書かれていますか？ また、好きな／おすすめのミステリ作品がありましたら、お聞かせください。

玖馬) 実はもともと長編を書いていたのですが、それはSFミステリ的な分野だったので、ご推察の通りです！

ミステリは実はSFと同じくらい小さい頃から読んでいて、米澤穂信「古典部シリーズ」や森博嗣「S&Mシリーズ」がおすすめです。

木下) おお、やはり！ 米澤穂信も森博嗣も、勧めてくれる人がいたり気になっていたりで、SF読みとしては読んでおかなくては、と、ずっと思っていました。今度読んでみようと思います。SFミステリも大好物なので、お待ちしております！

(Q4) 優しい世界について

木下) 「みをつくしの人形遣いたち」(『大阪SFアンソロジー』(社会評論社/ Kaguya Books))とも一脈通じるころだと思のですが、基本的に悪意の人物がない、優しい作品世界がとても心地よく感じました。このスタイルを選択するにあたって、心がけていることや目指したいことなどがありましたら、お聞かせください。

玖馬) こちらは自身の創作上の課題でもあるのですが、基本的に人間の悪意を描くのが凄く苦手というのがあり、結果としてこういうスタイルを採用しています。

一方でこれだといわゆる童話のような「お行儀のよい」話になりがちなので、その他の点でなるべくリアリティが出せるよう心がけています。個人的には個々の人々の悪意がなくとも物事が上手くいかないことは往々にしてあると思うので、そうした面が描写できる物語が書けるといいな~と思っています。

木下) 悪をなすつもりが皆無なのに、引き起こされてしまう悲惨。確かにありますよね。それを踏まえないと、優しい世界も成り立ち得ない。一方で、いち読者としては、あまり辛い現実を優しい世界に持ち込んで欲しくない気持ちもあり。悩ましいです……

(Q5) トーマス・クーンの「通約不可能性」について

木下) AIアライメントネットワーク [「超知能がある未来社会シナリオコンテスト」](#)で佳作入賞されたシナリオ「機械仕掛けの翼とともに：学術AI (SAI) がもたらす第3次科学革命」を読ませていただき、「3.3 機械仕掛けの翼とともに (2050年6月)」に特に共感しました。超知性にも超知性なりの世代間格差や悩みごとがあるのだろうか、と。

トーマス・クーンの「通約不可能性」に興味湧いてきたのですが、おすすめの入門書などはありますか？ また、通約不可能性（異なる枠組みの理論体系同志では、概念の「橋渡し」ができないことがありうる、というふうにざっくり理解しました）について、本シナリオでは「とはいえ頑張れば何とかならないでもない」的な、希望のあるスタンスが示されたように感じたのですが、通約不可能性について、玖馬さんご自身のお考えがありましたら、お聞かせください。

玖馬) ありがとうございます！

クーンの通約不可能性については、クーン本人による「科学革命の構造」の中で一番よく述べられていると思うので、こちらを直に読んで頂くのがいいと思います（新訳版がオススメです）

「科学革命の構造」は一般向けに書かれた本で、必ずしも科学哲学や科学史を勉強したことがなくとも、わりとすらすらと読み進めることが出来ると思います。（正直、あまりクーンの入門向け解説書みたいなものは日本語文献だとなく、）

また通約不可能性に対する自身のスタンスですが、まさに木下さんが示して頂いた通りです（基本的に頑張れば何とかならないでもない）

ただ、一方でそれが人間の処理能力の範疇に収まるかは別の話なので（例えばニュートンでさえ、その本来の思想を現代の人間が「理解」するには専門の研究者による長年の研究の集積が必要となる）仮に自律的に科学研究が可能なAGIが生まれた時には、その研究成果は原理的には理解できるが、事実上は理解不能、ということが起こると思います。

今のわたしたちは自分の専門領域以外について理解するのは困難ですが、これが科学者自身の専門領域でも起こる、という感じです（まさにシンギュラリティですね！）

木下) ありがとうございます！ 「科学革命の構造」、読んでみます。宇宙物理学者の松田卓也先生（ご自身の興味から、人工知能を考える連続講演会 [「シンギュラリティサロン」](#)を主催）が、どこかで書かれていた言葉を思い出しました。「おそらく私が生きているうちに、機械がヒトの知能を越える日がやってくる。その時に、その意味が判るようになっていたい」見習いたいと思います。少しでも。

一般部門受賞者に聞いてみた 〈個別質問：鷹羽玖洋さん〉

(Q1) 機械知性と「もののあはれ」

木下) 受賞作で描かれた、儚く一回限りの、個別具体的なものへの思い入れがとても魅力的です。機械知性が、この感覚を将来獲得すること
はあり得ると思われますか？ また、もし可能だとして、それは我々ヒトにとって望ましいことだと思われますか。

鷹羽) 入賞作では、主眼が本の書き込みだったため、機械知性を人間的なものにしましたが、私個人の考えは悲観的。
機械知性に感情を付与したとしても、それはあくまで”設計された”反応と思います。

また、機械知性が自然発生的に人間っぽい感情反応を獲得したとしても、それがヒトや他の有機生物と共感できるものになるかは疑問です。
ヒトを含む地球生物が進化の中でその能力を獲得してきたのに対し、機械知性の場合、他の生物とは様々な条件が異なります。

その場合、発生する感情が人間と共感できるものになるのかどうか？ 自分にはちょっと不明です。

木下) 確かに、地球外知性(が、もしいたとして)以上に、共感不可能なものかが機械知性の中に生まれてくる可能性はあるかもしれませんが、
私は、機械知性といえども人間を経由して物理世界の制約を受けている以上、共感の足がかりはある、と考えるのが好きなほうですが、
そうなる確かな根拠がある、というよりは、そう思うと心地よい、また、それができなければ、ヒトより賢くなった機械知性は、いずれ「理
解不能な神様」になってしまってとても具合が悪い、ということが、私の「マシンと心が通じるといいな」願望の根にあるように思います。
そうできるように全力で頑張らないとヤバイのじゃないか、という。

(Q2) 文章の光沢感について

木下) 鷹羽さんの文章には、なんとなく、光沢感、のようなものを感じます。描写において、特にここに意を用いている、的なことはありますか？

鷹羽) 自分はフリッツ・ライバーを崇めており、なんとかあんな描写をしたいと思っているけれど足元にも及びません。ライバーの描写（浅倉久志さんの邦訳）は、作品の世界観・雰囲気補強する語彙を用いたり、適切な共感覚を呼び起こす言葉を選んでいると思います。自分もたまに語彙を収集したり、書くときは意味・字面・音などに注意して、言葉の組み合わせを探します。

木下) なるほど！ ファファード&グレイ・マウザーシリーズはたぶん2冊ほど読んでいるのですが、フラフラと楽しく読み進むばかりで、この楽しさはどこからどう醸し出されているのか、を考えたことが、恥ずかしながらありませんでした。「バケツ一杯の空気」や「ビート星群」のケレンの効いた設定も、なぜあんなにすんなりと頭に入ってきたのか。読み直して考えてみたいと思います。

(Q3) 「重ね塗り」について

木下) これは直感なのですが、鷹羽さんはかなり推敲されるタイプなのではなかろうか、と思うのです。最低でも三回は塗らないと、この艶は出ないだろうな、と。(もし見当違いでしたらすみません!) 初稿から完成まで、どのくらい推敲を重ねておられますか?

鷹羽) ご指摘通りです。ハリウッドの脚本家でも ①書き終わった部分を絶対に見直さず最後まで走るタイプ と、②推敲しながら進めるタイプ といるらしいのですが、自分は完全に②。これは完璧主義的な性格の悪癖で、遅筆のゆえんですね……。

推敲は数え切れません。書きながら推敲し、終えた後は客観性を取り戻すため数日～数週間置いて推敲、更にまた放置して推敲すると、気分的に落ち着きます。

木下) ああ、やっぱり! 「客観性を取り戻すため」が特に刺さります。グッサリ、です。我が身を顧みるに、……その、初稿から応募まで一ヶ月以上確保できたことが、一度たりともない、という。初稿の後、なぜ辛抱できずにすぐ応募しちゃうのか。己の無意識に、ひとつ、厳しく向き直ってみたいと思います!

(Q4) 星々への長い道と、その敵

木下) 受賞作で描かれる、優雅で懐の深い恒星間文明は、仔細に見ればいろいろ瑕疵もあるのですが、総じてわれわれが将来目指すべき理想の形のひとつ、と（勝手に）感じました。人類がそこにいたる道筋を阻むものがもしあるとしたら、それはどのようなものだと思いますか？

鷹羽) 恒星間旅行したいですね。自分はブラックホールを見てみたい。

人類の最大の敵は人類だと思います。

以前、ある科学者が「300年以内に人類は滅びると思う」と言っていたのをTVで見たことがあります。

人間らしい野心を維持しつつ、自滅せずにある程度の文明レベルを維持できたら、自然と恒星間へ旅立つ日が来るんじゃないでしょうか。

木下) 確かにそうですね。とにかく生き延びること。むやみに自分の首を絞めないこと。それさえ叶えば、あとはゆっくりじっくり、取り組んでいけばいい。そう、「惑星防衛」とかに。そんなことを思いました。本当にそうなって欲しい。

(Q5) 本棚あふれに立ち向かう！

木下) すべての本読みが逃れ得ない宿命、「本棚あふれ」。木下はもう諦めてしまっていますが(ライ!)、こんな工夫でしのいでいる、といった生活の知恵がもしありましたら、ぜひご教示ください！

鷹羽) 図書館の近くに住みましょう！ 図書館の蔵書は『預けてある本』と思いこみ、図書館にない本、どうしても手元に置いておきたい本だけを買えばよいのです……！ 大ブーイングが聞こえるな？

というわけで今は大変助かっているのですが、まじめに答えると、自分も教えて欲しいですね……。電子書籍もあるけど紙で欲しい。書斎がほしいなあ、本棚で覆われた書斎。宝くじ10億円当たらないかな。

木下) 木下も図書館には頭が上がりません。本当にありがとう図書館。ああ図書館の隣に住みたい！ なんなら住み込みでもいい。国会図書館がオンライン閲覧サービスを始めて、古い翻訳SF(『ロケット練習生』とか『水星基地SOS』とか)が居ながらにして、タダで読めるようになったのは衝撃でしたが、やっぱり「書斎」は欲しい。10億あればなんとか。どうせ自分では維持しきれないので、公的機関に寄付して図書館を設立してもらい、出資者特権で選書と優先閲覧権を確保。ああ夢の読書ライフ！(いろいろと逃げている……)

(Q6) 「銀の滴降る降る」のこと

木下) 久野曜名義で第8回創元SF短編賞・長谷敏司賞を受賞された、「銀の滴降る降る」が気になっています。どこかで読めますか？ また、未発表でしたら、発表の予定はありますでしょうか。

鷹羽) ご質問ありがとうございます。当初はどう改稿すべきか分からず放置していたんですが、最近やっと改稿しました。

可能なら年内にカクヨムに載せるつもりです。ただ、他社入賞作品の投稿サイトでの公開がOKか不明なので、創元社さんに確認してからにします。

木下) うおお！ これは楽しみです。たしか狼の話なのですよ。というか、カクヨム公開は「無料読書ライフ」実践者には泣けるほど嬉しいお話なのですが、カクヨムの限定（少額有料）公開にするにしても、あまりにも気前が良すぎるような。個人電書出版も視野に入れてもよいのではないのでしょうか？ 最近、オリジナルアンソロジーも増えてきているので、ひとつ売り込みをかけてみる手も。

(どうですか各社編集部の皆様！)

一般部門受賞者に聞いてみた 〈共通質問〉

(Q1)あなたにとってSFとは、どのようなものでしょうか？

(柚木理佐さん)
「Science fantasy」

(木下充矢)
空想科学小説、または”Way of Life”。
日頃から「SF的にこれはどうなのか」と、
つい考えてしまいがちです。
いつの、誰のSFなのか、はさておき！

(鷹羽玖洋さん)
自分が書くときは『Scientific Fantasy』
もしくは『すこしホラー』。
消費する側としてはあまり気にしていない。

(玖馬 巖さん)
科学 (Science) と物語 (Fiction) という、
二つの異なる文化の世界を架橋してくれるもの
です。広義の科学技術コミュニケーション
の手段のひとつでもあります。

(Q2)あなたにとって星新一とは？

(柚木理佐さん)

「クールで洒脱。しかし、時に垣間見える、ヒトへの深い絶望と捨て切れない希望」

(鷹羽玖洋さん)

おやつのように気軽に摘まめる短さで、皮肉や機転の利いた展開に唸らされる。熱烈なファンが多い印象。

(木下充矢)

名言「原子を見せてください」のひと。最もSF作家らしいSF作家。「ひとつの装置」のラストは記憶に焼き付いています。

(玖馬 巖さん)

いつの時代でも大人から子供まで楽しめる作品を書いている大SF作家。安部公房の永遠のライバル。(わたしは安部公房のファンです)

(Q3)好きなSF！

(柚木理佐さん)

『渚にて』ネヴィル・シュート
『青い宇宙の冒険』小松左京

(鷹羽玖洋さん)

どちらかという視覚メディアやゲームのSFに親しんできた。小説では、堀晃さんの『遺跡の声』の続きを永遠に待ってます。
地味にSCPも好き。SCP-3000とSCP-721-JPは良いぞ。

(木下充矢)

「太陽からの風」クラーク
「神への長い道」小松左京
「星空のフロンティア」谷甲州
『一億年の望遠鏡』春暮康一
※今回は宇宙モノで！ やっぱ宇宙SFは良い。
SCPは1281「さきがけ」を推します。
“Did I do well?”

(玖馬 巖さん)

高校生の頃に出会った沖方丁「マルドゥック・スクランブル」が、自身の中でのSFのバイブルであり続けています。また同時期のゼロ年代ライトノベルには非常に影響を受けており、もっと多くの人に読まれて欲しいなと思っています。(秋山瑞人「イリヤの空、UFOの夏」や吉田直「トリニティ・ブラッド」等)

(Q4) 書き続けるためには？

(柚木理佐さん)

小説に限らず、音楽、絵、映画などなど、良いものをインプットすると、書きたい気持ちが生まれます。その気持ちが満ちてくるのを待って、書くタイミングを逃さないことが大切だと気づきました。早すぎても、遅すぎてもうまく行きません。

(鷹羽玖洋さん)

基本的に、十年後の自分のために書いてます。自分のヘキは変化しないのだ。

(玖馬 巖さん)

① 自分が好きなことを書くこと ② 何らかの目標を設定し続けること ③ 創作仲間をもつこと の3つが大切かなと思います。(特に①が一番大事)

あとは、小説に関わらず様々な作品に触れることで、クリエイターの端くれとして自分もやるぞ! というモチベーションをじわじわ上げています。

(例えばゲーム媒体だと「十三機兵防衛圏」「サイバーパンク2077」など)

(木下充矢)

なんと言っても健康第一、だと思えます! ネタをつかんだ時に、わーっと一気に書き上げようとする人が多いので、日頃から余力を蓄えておかないと、「膨らみ始めたリチウムイオン電池」になってしまうことしばしば。嗚呼。

(Q5) 今後の活動について

(柚木理佐さん)

コツコツ公募に挑戦します。年末に向けて最大目標は創元SF短編賞です。(創元SF短編賞と創元ミステリ短編賞があるのだから、創元ファンタジー短編賞も創設して欲しいです、切実に)

(鷹羽玖洋さん)

超遅筆ゆえ、気ままにカクヨムあたりで作品公開しています。時代小説や現代ホラーにも挑戦したい。イラストではskebのIDもあるので、もし御用があればどうぞよろしく(笑)

(木下充矢)

長編を頑張りたい！ 公募を渡り歩いて連作を書き連ねる、という所業を繰り広げてきたシリーズも、そろそろ次をなんとかしたい……いや、します！

今年初めて、在籍する創作サポートセンターから文学フリマ大阪に出展参加し、大きな刺激を受けました。東京・京都も参加することになりそう。

菅浩江先生の「ネコ乱入！ 創作講座」にも6月から参加、毎回めくるめく思い。フルタイム勤め人なのに体力は大丈夫なのか。ザッタ・オンラインに書くつもりのネタを溜めすぎているので、京フェスレポートはサッと書きたいなあ。

(玖馬 巖さん)

8月以降、広義のSFプロトタイピングの活動が2つ走っており、一方は11月、もう片方も年内には表に出る予定です。また既に発表もされましたが、「零合」の第3号に自身の短編が掲載される予定です。書きたいけれどずっと書けていないネタもあるので、そちらは今年の創元SF短編賞への応募を目指します。

(Q6) 「第12回星新一賞」に応募しましたか？

(柚木理佐さん)

私は応募しました。
11回は叙情的な短編小説を書いたので、12回は
ショートショートで挑戦しました。

(鷹羽玖洋さん)

12回は出しておりません。参加される方の作品が読めるの
を楽しみにしています！

(木下充矢)

ぐっ……木下は落としました。締め切り前日に(な
ぜ!)結末までのあらすじが降ってきて、通勤電車の中
でスマホで本文を書き始めたのですが、もちろん間に合
わず。無理やり応募しなくてかえって良かった、という
ことにさせてください。来年には必ず!(空耳に鬼の高
笑いを聞きながら)

(玖馬 巖さん)

こちら恥ずかしながらしていません。(実は去年
の授賞式の後、第七回・第八回の受賞者の鵜川
さんと今年で勝負だ!と言っていたので怒られそ
うです笑)
単純に忙しいというのもあるのですが、個人的に
は去年の結果(優秀賞)に非常に満足しているの
で、今後星賞についてはOBとして後方腕組みし
て、新しい才能が生まれていくのを眺めていこう
と思います(ワシが育てた……)

ありがとうございました！